

生涯教育研修活動報告書

一般検査研究班

- 1 実施日時： 2021 年 9 月 16 日 19 時 00 分 ～ 20 時 00 分
- 2 会場： WEB 開催 点数： 専門 — 20 点
- 3 主題： 髄液検査の標準化と最近のトピックス
- 4 講師： 奈良 豊 (埼玉医科大学総合医療センター)
- 5 協賛： なし
- 6 参加人数： 会員 88 名 賛助会員 0 名 非会員 0 名
- 7 出席した研究班班員：藤村 和夫 室谷 明子 柿沼 智史 佐々木 菜緒
渡邊 裕樹 小針 奈穂美 中川 禎己
- 8 研修内容の概要・感想など

今回の研究会は、髄液検査分野において全国的に活躍され、現在の髄液検査法のガイドラインである「髄液検査法 2002」や「髄液検査技術教本」の発刊にも携わっている奈良豊氏に、髄液検査に関する標準化と最近のトピックスをテーマにご講演いただいた。

講演の中で血性髄液の細胞数補正についての解説があった。血性髄液では、髄液由来であるか、血液由来であるかの推定が困難なため、補正による細胞報告は信頼性に乏しいとの事だ。また、赤血球補正式は煩雑であり、場合によっては細胞数がマイナスになるため、医原的な混入による血性髄液では、細胞補正は行わず、参考値または算定不能として報告することが望ましく、必要に応じて、臨床とのコンセンサスをとることが重要であるとの事であった。現在、多くの施設で細胞補正を実施していないが、細胞補正を実施している施設もいまだにあるのが現状である。今回を機に再検討していただく事を希望し、髄液検査の標準化に向けて大きく前進する事を期待する。

また、奈良氏の施設で経験した症例を基に、髄液検査を必須とする疾患についての解説があった。細菌性髄膜炎は重篤な疾患であり、今回は肺血症を伴った細菌性髄膜炎の症例であった。細菌性髄膜炎は、一般的に細胞が急激に増加し、好中球優位であるが、細胞応答性が低下した髄液では、細胞増多に乏しく、好中球優位とは限らない。またウィルス性髄膜炎であってもリンパ球優位とは限らず、髄液を採取する時点での患者病態により、細胞の優位性

が逆転することを念頭に検査を進めなければならない。また、好酸球が増多する好酸球髄膜炎や、稀な症例として、髄液中に核が花びら状になるフラワーセルを認めた HTLV- I associated myelopathy (HAM) についての解説があった。

髄膜炎によって、重症度、予後が異なるため、早期に診断し的確な治療を行うかが患者の予後を大きく左右する。そのためには、正しい知識と技術を身に付けることが重要である。今回、髄液検査に関する標準化と最近のトピックスを中心に、髄液中で細胞が増加するメカニズムや、髄液検査の進め方とその注意点なども幅広く、基礎的な部分についても再確認することができる内容であり、今後の日常検査において大変参考となる内容であった。

提出日 2021年 10月 21日

文責：室谷 明子